

アレルギー性疾患に関する3歳児全都調査 (平成16年度)

結果

第 1 章 調査の目的及び方法

第1章 調査の目的及び方法

(1) 調査の目的

アレルギー性疾患の現状及び前回調査(平成 11 年度)からの罹患状況の推移をみるとともに、都民のニーズも合わせて把握し、今後のアレルギー性疾患対策の基礎資料とする。

(2) 調査の方法

① 調査対象と方法

都内の3歳児のうち平成16年9月に区市町村で実施された3歳児健康診査の受診対象者及びその保護者を対象とした。各区市町村に協力を依頼し、無記名による自記式調査票を配布し回収・解析を行った。

対象者数は8,294人で、その内有効回答数は4,305人(51.9%)であった。

② 調査項目

基本属性、アレルギー性疾患の状況、生活環境及び生活習慣、アレルギー性疾患に関する意見・要望を調査項目とした。

項目	内容				
基本属性 (対象者の概要)	性別				
	住所 (23 区 多摩地域 島しょ)				
	出生順位				
アレルギー性疾患 の状況	本人の 罹患状況	親の 罹患状況	症状の 有無	医師の 診断	ぜん息
					食物アレルギー
					アトピー性皮膚炎
					アレルギー性鼻炎 (花粉症を含む)
					アレルギー性結膜炎 (花粉症を含む)
					じんましん
					その他のアレルギー
生活環境及び生活習慣	寝室の床の材質				
	寝室の床の掃除頻度				
	寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度				
	室内の定期的な換気				
	家の造り				
	同居人の喫煙状況				
	授乳方法				
	保育園・幼稚園の通園状況				
	ペットの飼育状況				
アレルギー性疾患に関する 意見・要望	「アレルギー」に関して日ごろ感じていること				
	「アレルギー」についての具体的な要望				

③ 調査上の分類と定義

ぜん息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、じんましん、その他のアレルギー性疾患における症状と診断の定義を下記に示した。

<症状>

	分類	定義	(参考)前回調査 定義
症状	ぜん息・ぜん鳴	これまでにセキこんだり息が「ゼーゼー」「ヒューヒュー」したりして苦しくなる症状が、2回以上あった者	これまでに息が「ゼーゼー」「ヒューヒュー」(ぜん息様症状)して苦しくなる発作が2回以上あった者 これまでに左記の「疾患」の症状のあった者
	食物アレルギー	これまでに食事が原因と思われるアレルギーの症状を起こした者	
	アトピー性皮膚炎	これまでにアトピー性皮膚炎の症状があった者(皮膚の乾燥とかゆみを伴う湿疹をくりかえす)	
	アレルギー性鼻炎(花粉症を含む)	これまでにアレルギー性鼻炎(花粉症を含む)の症状があった者(くしゃみや鼻水、鼻づまりが長引く)	
	アレルギー性結膜炎(花粉症を含む)	これまでにアレルギー性結膜炎(花粉症を含む)の症状があった者(目のかゆみや充血が長引く)	
	じんましん	これまでに左記の「アレルギー性疾患」の症状のあった者	
	その他のアレルギー性疾患		

<診断>

	分類	定義	(参考)前回調査 定義
診断	ぜん息	症状があり、これまでに、「ぜん息」「ぜん息性気管支炎」又は「小児ぜん息」と医師に診断された者	症状があり、「ぜん息」「ぜん息様気管支炎」又は「小児ぜん息」と医師に診断された者 症状があり、左記の「疾患」について医師の診断を受けた者
	食物アレルギー	症状があり、これまでに、左記の「アレルギー性疾患」であると医師に診断された者	
	アトピー性皮膚炎		
	アレルギー性鼻炎(花粉症を含む)		
	アレルギー性結膜炎(花粉症を含む)		
	じんましん		
	その他のアレルギー性疾患		

第2章 調査結果

第2章 調査結果

(1) 対象者の概要

対象者8,294人のうち、有効回答数は4,305人(51.9%)であった。性別は男女比がほぼ1:1(表0-1)で地区別では23区が約3分の2を占めた(表0-2)。また出生順位では第2子が34.8%で一番多かった(表0-3)。対象者は前回調査(平成11年度)と同様の構成であった。前回調査では除かれていた島しょ地区が今回調査で加わっている。親の年齢階級別の割合では父親で35~39歳代(34.5%)、母親で30~34歳代(41.6%)が一番多かった(表0-4)。前回調査と比べると親の年齢分布は高い年齢層に移行していた。

			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
男子	2233	51.9%	2256	51.1%
女子	2072	48.1%	2140	48.5%
合計	4305		4415	

			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
23区	2782	64.6%	2752	62.3%
多摩地域	1492	34.7%	1653	37.4%
島しょ	17	0.4%	0	0.0%
不明	14	0.3%	10	0.2%
合計	4305		4415	

			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
第1子(兄弟・姉妹いない)	1393	32.4%	1176	28.0%
第1子(兄弟・姉妹いる)	849	19.7%	993	23.7%
第2子	1496	34.8%	1578	37.6%
第3子以降	491	11.4%	446	10.6%
不明	76	1.8%	222	5.0%
合計	4305		4415	

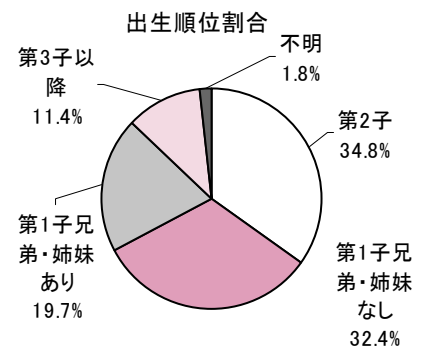
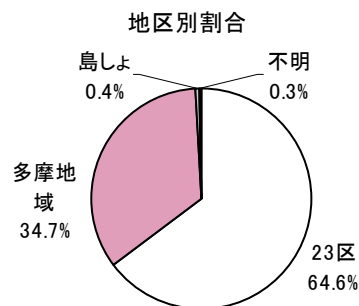
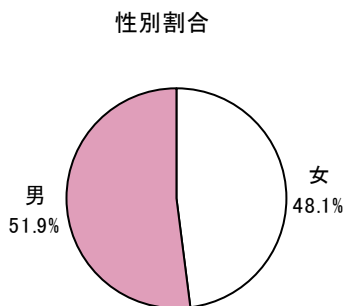


表 0-4 親の年齢

					(参考) 前回調査			
	父親		母親		父親		母親	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	人数	割合	人数	割合
～19 歳	0	0.0%	4	0.1%	0	0%	0	0%
20～24 歳	50	1.2%	75	1.7%	28	0.6%	62	1.4%
25～29 歳	313	7.3%	563	13.1%	364	8.2%	695	15.7%
30～34 歳	1322	30.7%	1790	41.6%	1402	31.8%	1803	40.8%
35～39 歳	1485	34.5%	1359	31.6%	1355	30.7%	1088	24.6%
40～44 歳	654	15.2%	333	7.7%	572	13.0%	208	4.7%
45～49 歳	180	4.2%	27	0.6%	154	3.5%		
50～54 歳	42	1.0%	0	0.0%				
55～59 歳	16	0.4%	1	0.0%	40	0.9%	14	0.3%
60～64 歳	3	0.1%	0	0.0%				
65～69 歳	1	0.0%	0	0.0%				
不明	239	5.6%	153	3.6%	500	11.3%	545	12.3%
合計	4305		4305		4415		4415	

(2) アレルギー性疾患の状況

① アレルギー性疾患の罹患状況

何らかのアレルギー性疾患の罹患割合(症状)は、51.5%であり、前回調査(平成11年度)と比べ上昇を認めた(表1-1)。各疾患別では、アレルギー性鼻炎(花粉症を含む)において、症状、診断ともに罹患割合の大幅な上昇を認めた。また、ぜん息・ぜん鳴、食物アレルギーでは診断と比べ症状において罹患割合の増加を認めた(表1-2)。ただし、ぜん息・ぜん鳴については、質問文が異なるため単純比較はできない。性別でみると前回同様男子の方が罹患割合は高かった($p < 0.05$)。

各アレルギー性疾患の症状でみると、アトピー性皮膚炎、ぜん息・ぜん鳴の症状(それぞれ20.5%、19.4%)を呈するものが多く認められた(表1-2)。食物アレルギーでは過去1年以内の症状の割合は6.5%であり他の疾患と比べて生後2年までの既往者が多かった(表1-3)。

表1-1 何らかのアレルギー性疾患の罹患状況

何らかの アレルギー	年	症状あり		診断あり	
		人数	割合	人数	割合
	1999年	17,100	41.9%(男45.0%/女39.0%)	12,100	36.8%
	2004年	21,500	51.5%(男55.3%/女49.4%)	12,700	36.7%

表1-2 各アレルギー性疾患の罹患状況の推移

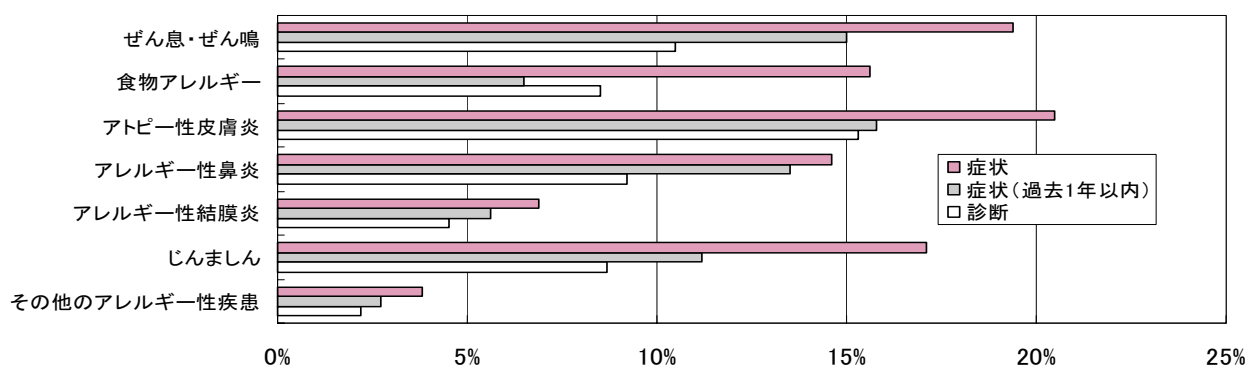
疾患	症状		診断	
	1999年	2004年	1999年	2004年
ぜん息・ぜん鳴	9.5%	19.4%	7.9%	10.5%
食物アレルギー	9.4%	15.6%	7.1%	8.5%
アトピー性皮膚炎	18.0%	20.5%	16.6%	15.3%
アレルギー性鼻炎	7.5%	14.6%	6.1%	9.2%
アレルギー性結膜炎	5.1%	6.9%	4.6%	4.5%
じんましん	15.0%	17.1%	11.9%	8.7%
その他のアレルギー性疾患	3.7%	3.8%	3.0%	2.2%

*ぜん息・ぜん鳴における症状の質問文は1999年と2004年で異なり、今回調査では単純比較はできない。

表1-3 各アレルギー性疾患の症状と診断の割合

疾患	症状		症状(過去1年以内)		診断	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
ぜん息・ぜん鳴	818	19.4%	627	15.0%	432	10.5%
食物アレルギー	657	15.6%	275	6.5%	357	8.5%
アトピー性皮膚炎	831	20.5%	643	15.8%	618	15.3%
アレルギー性鼻炎	581	14.6%	543	13.5%	365	9.2%
アレルギー性結膜炎	270	6.9%	223	5.6%	177	4.5%
じんましん	681	17.1%	450	11.2%	345	8.7%
その他のアレルギー性疾患	144	3.8%	105	2.7%	85	2.2%

アレルギー性疾患の罹患状況



② アレルギー性疾患の合併

前回調査同様、各疾患の症状、診断において、他のアレルギー性疾患を高頻度に合併していた(表 2-1、表 2-2)。特に食物アレルギーではアトピー性皮膚炎との合併が高率(症状 54.2%、診断 64.9%)であった。

表 2-1 各アレルギー性疾患の併発状況(症状) (p<0.01)

	ぜん息・ぜん鳴		食物アレルギー		アトピー性皮膚炎		アレルギー性鼻炎		アレルギー性結膜炎		じんましん		その他のアレルギー性疾患	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	818	19.4%	657	15.6%	831	20.5%	581	14.6%	270	6.9%	681	17.1%	144	3.8%
ぜん息・ぜん鳴の併発			185	29.0%	244	29.9%	191	33.4%	100	37.7%	165	24.7%	46	32.9%
食物アレルギーの併発	185	23.1%			333	40.4%	150	26.2%	82	30.8%	277	41.6%	45	32.8%
アトピー性皮膚炎の併発	244	32.8%	333	54.2%			213	40.5%	103	41.4%	218	35.0%	32	27.4%
アレルギー性鼻炎の併発	191	26.2%	150	25.8%	213	30.3%			135	53.8%	137	22.4%	33	26.6%
アレルギー性結膜炎の併発	100	13.9%	82	14.3%	103	14.8%	135	26.1%			77	12.9%	20	17.2%
じんましんの併発	165	22.7%	277	47.2%	218	30.7%	137	26.3%	77	31.8%			28	23.7%
その他のアレルギー性疾患の併発	46	6.6%	45	8.4%	32	5.0%	33	6.9%	20	9.3%	28	5.0%		

表 2-2 各アレルギー性疾患の併発状況(診断)

	ぜん息		食物アレルギー		アトピー性皮膚炎		アレルギー性鼻炎		アレルギー性結膜炎		じんましん		その他のアレルギー性疾患	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	432	10.5%	357	8.5%	618	15.3%	365	9.2%	177	4.5%	345	8.7%	85	2.2%
ぜん息の併発			88	26.1%	121	20.6%	72	21.1%	42	24.9%	49	14.8%	14	17.3%
食物アレルギーの併発	88	21.0%			209	34.3%	70	19.6%	41	23.8%	95	29.0%	14	17.9%
アトピー性皮膚炎の併発	121	31.1%	209	64.9%			109	34.6%	61	38.1%	105	34.1%	13	20.3%
アレルギー性鼻炎の併発	72	19.3%	70	24.0%	109	21.7%			77	47.8%	64	20.8%	17	25.0%
アレルギー性結膜炎の併発	42	11.4%	41	14.2%	61	12.2%	77	24.9%			36	12.2%	16	25.0%
じんましんの併発	49	13.3%	95	33.0%	105	20.9%	64	20.3%	36	23.1%			9	14.5%
その他のアレルギー性疾患の併発	14	3.9%	14	5.0%	13	2.7%	17	5.7%	16	10.7%	9	3.3%		

③ 親のアレルギー性疾患の罹患状況

親のアレルギー性疾患の罹患の割合は、父親、母親ともにアレルギー性鼻炎が最も高かった(表 3-1)。前回調査同様に、アレルギー性疾患の診断を受けた3歳児の親は、その疾患を高頻度に持ち合わせていた(表 3-2)。

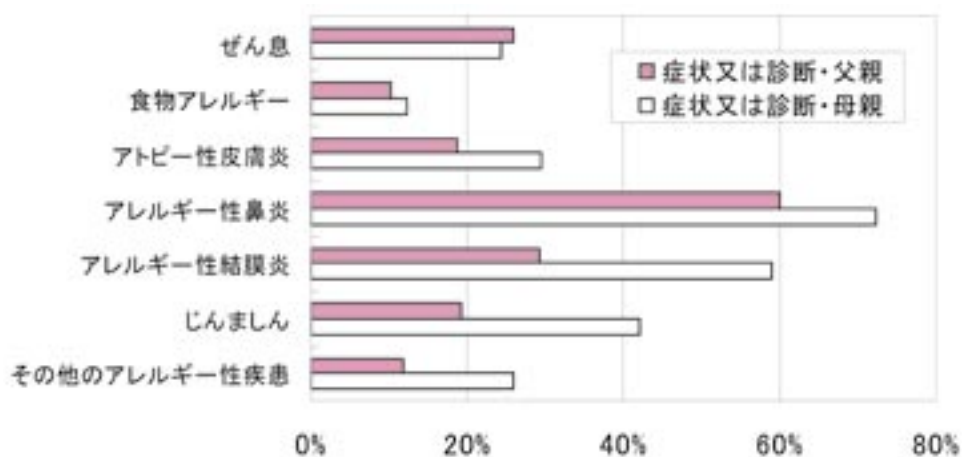
表 3-1 親のアレルギー性疾患の罹患

	症状又は診断・父親		症状又は診断・母親	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
ぜん息	483	12.0%	450	11.0%
食物アレルギー	239	6.0%	300	7.3%
アトピー性皮膚炎	376	9.4%	588	14.4%
アレルギー性鼻炎	1847	45.5%	2024	48.4%
アレルギー性結膜炎	703	17.6%	1076	26.2%
じんましん	429	10.8%	810	19.7%
その他のアレルギー性疾患	147	3.8%	268	6.6%

表 3-2 3歳児と親の各アレルギー性疾患との関連 (p<0.01)

(3歳児 下記の診断あり)	症状又は診断・父親		症状又は診断・母親	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
ぜん息	102	25.8%	99	24.3%
食物アレルギー	34	10.2%	41	12.2%
アトピー性皮膚炎	107	18.7%	174	29.6%
アレルギー性鼻炎	205	59.9%	258	72.3%
アレルギー性結膜炎	47	29.2%	102	59.0%
じんましん	64	19.3%	141	42.0%
その他のアレルギー性疾患	9	11.7%	21	25.9%

3歳児診断疾患と親のアレルギー疾患罹患との関係



④ ぜん息・ぜん鳴の症状と診断

男子は女子に比べて、症状と診断の割合が高かった(表 4-1、表 4-3)。地域差は特に認めなかった(表 4-2、表 4-4)。前回調査でも症状で同様の結果であった。

*ぜん息・ぜん鳴における症状の質問文は 1999 年と 2004 年で異なり、今回調査では単純な比較はできない。

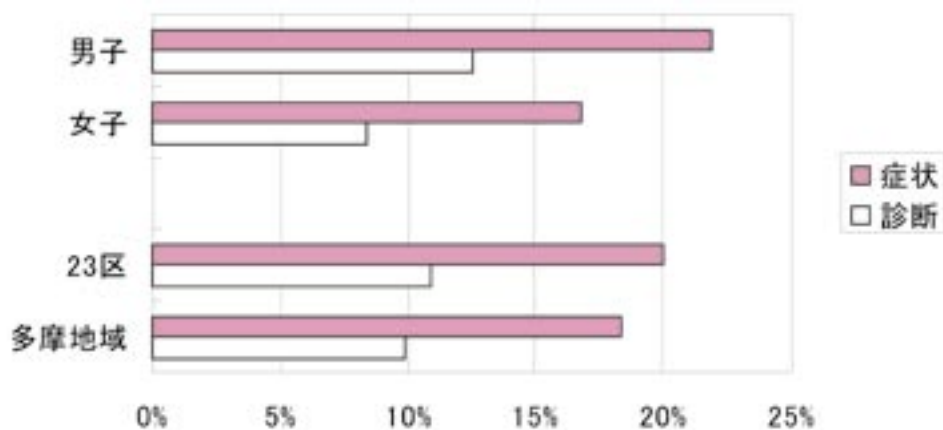
	(人数)	(割合)	(参考)前回調査 (人数)	(割合)
	818		391	
男子	479	21.9%	241	11.5%
女子	339	16.8%	146	7.2%

	(人数)	(割合)	(参考)前回調査 (人数)	(割合)
地区	818		391	
23区	544	20.0%	251	9.7%
多摩地域	267	18.3%	138	9.0%
島しょ	2			
不明	5			

	(人数)	(割合)
性別	432	
男子	264	12.5%
女子	168	8.4%

	(人数)	(割合)
地区	432	
23区	290	10.9%
多摩地域	141	9.9%
島しょ	1	
不明		

ぜん息の症状と診断 性別／地区 別



⑤ ぜん息の重症度分類

重症度分類では症状、診断共に間欠型が一番多かった(表 5-1、表 5-2)。診断では症状と比べると中等症持続型、重症持続型 1、2 の割合が高かった(表 5-2)。(使用した重症度分類は今回と前回で異なる)

表 5-1 ぜん息・ぜん鳴の重症度分類(症状)

	(人数)	(割合)
間欠型	485	76.1%
軽症持続型	57	8.9%
中等症持続型	50	7.8%
重症持続型 1	29	4.6%
重症持続型 2	16	2.5%
不明	181	

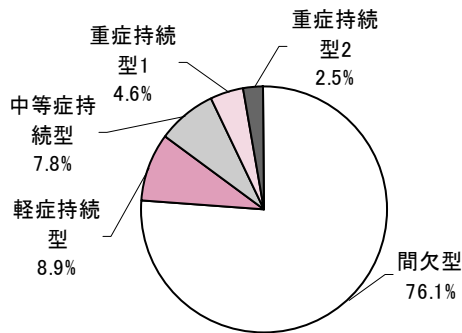
(参考)前回調査

	(人数)	(割合)
軽症	237	69.9%
中等症	90	26.5%
重症	12	3.5%

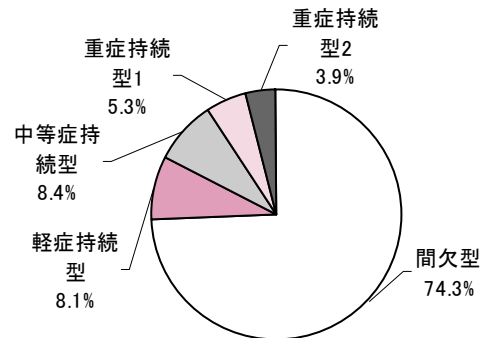
表 5-2 ぜん息の重症度分類(診断)

	(人数)	(割合)
間欠型	266	74.3%
軽症持続型	29	8.1%
中等症持続型	30	8.4%
重症持続型 1	19	5.3%
重症持続型 2	14	3.9%
不明	74	

ぜん息・ぜん鳴の重症度分類(症状)



ぜん息の重症度分類(診断)



⑥ ぜん息の発症、診断の時期

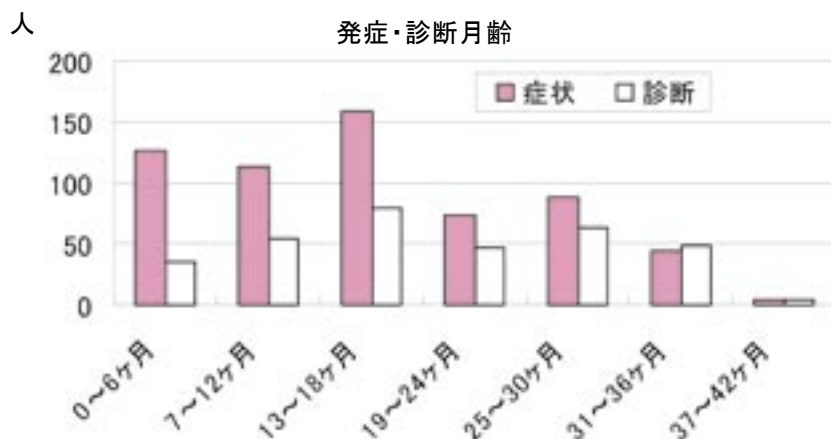
平均発症月齢と平均診断月齢はそれぞれ、16.2ヶ月、19.8ヶ月であった(表6-1、表6-3)。前回調査と比べ発症と診断の時期に大きな変化は認めなかった。

			(参考)前回調査	
	(平均月齢)	(標準偏差)	(平均月齢)	(標準偏差)
性別	16.2	9.3	17.6	9.6
男	16.0	9.3	16.9	9.5
女	16.6	9.4	18.8	9.7

	(人数)	(割合)
0～6ヶ月	126	20.7%
7～12ヶ月	113	18.6%
13～18ヶ月	159	26.1%
19～24ヶ月	74	12.2%
25～30ヶ月	88	14.4%
31～36ヶ月	44	7.2%
37～42ヶ月	5	0.8%

			(参考)前回調査	
	(平均月齢)	(標準偏差)	(平均月齢)	(標準偏差)
性別	19.8	9.6	19.3	9.6
男	19.2	9.3	18.8	9.7
女	21.0	10.0	20.3	9.5

	(人数)	(割合)
0～6ヶ月	35	10.5%
7～12ヶ月	55	16.5%
13～18ヶ月	79	23.7%
19～24ヶ月	47	14.1%
25～30ヶ月	63	18.9%
31～36ヶ月	49	14.7%
37～42ヶ月	5	1.5%



⑦ 食物アレルギーの症状と診断

男子は女子に比べて、症状と診断の割合が高かった(表 7-1、表 7-4)。地域差は特に認めなかった(表 7-2、表 7-5)。出生順位でみると症状と診断ともに兄弟のいない第 1 子の割合が多かった(表 7-3、表 7-6)。前回調査でも症状で同様の結果であった。

表 7-1 食物アレルギーの症状(性別) (p<0.01)			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
性別	657		409	
男子	377	17.2%	248	11.2%
女子	280	13.8%	161	7.6%

表 7-2 食物アレルギーの症状(地区)			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
地区	657		409	
23 区	422	15.5%	255	9.5%
多摩地域	231	15.8%	154	9.4%
島しょ	2			
不明	2			

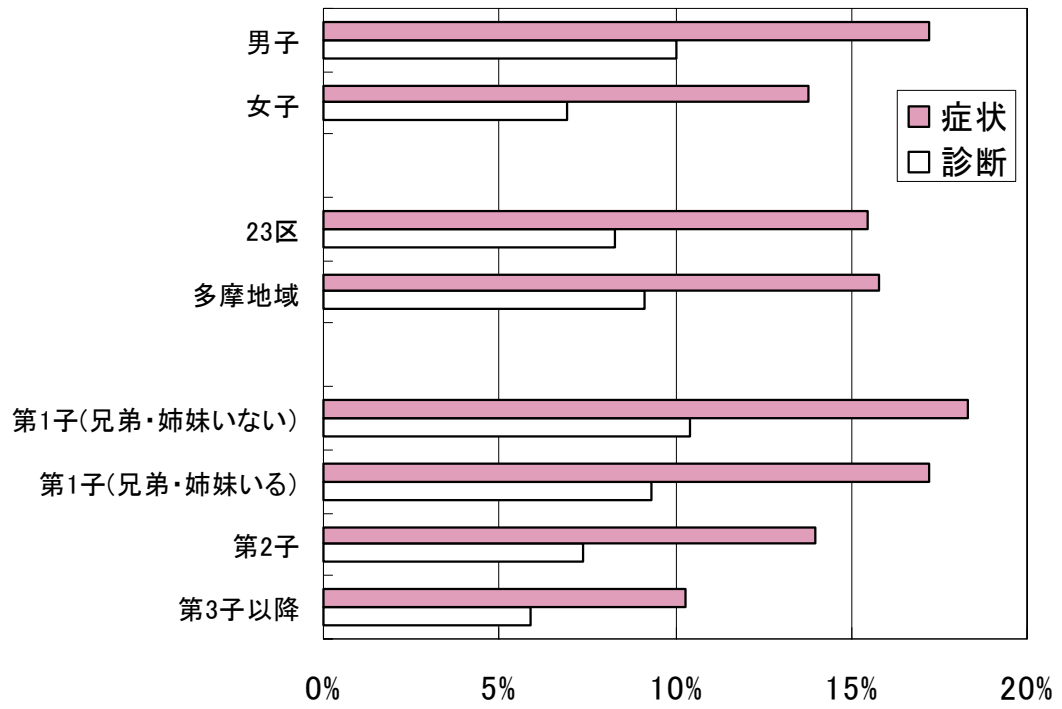
表 7-3 食物アレルギーの症状(出生順位) (p<0.01)			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
第 1 子(兄弟・姉妹いない)	250	18.3%	137	11.9%
第 1 子(兄弟・姉妹いる)	144	17.2%	94	9.6%
第 2 子	205	14.0%	126	8.1%
第 3 子以降	49	10.3%	36	8.2%
不明	9			

表 7-4 食物アレルギーの診断(性別) (p<0.01)		
	(人数)	(割合)
性別	357	
男子	219	10.0%
女子	138	6.9%

表 7-5 食物アレルギーの診断(地区)		
	(人数)	(割合)
地区	357	
23 区	224	8.3%
多摩地域	132	9.1%
島しょ	1	
不明		

表 7-6 食物アレルギーの診断(出生順位) (p<0.01)		
	(人数)	(割合)
第 1 子(兄弟・姉妹いない)	141	10.4%
第 1 子(兄弟・姉妹いる)	77	9.3%
第 2 子	108	7.4%
第 3 子以降	28	5.9%
不明	3	

食物アレルギーの症状と診断 性別／地区 別



⑧ 食物アレルギーの発症、診断の時期

平均発症月齢と平均診断月齢はそれぞれ、12.2ヶ月、11.4ヶ月であった(表8-1、表8-3)。食物アレルギーでは64.7%が1歳までに発症し、70.7%が1歳までに診断を受けていた(表8-2、表8-4)。

表8-1 食物アレルギーの症状が起きた月齢(症状)

	(平均月齢)	(標準偏差)
性別	12.2	8.8
男	11.7	8.4
女	12.9	9.2

表8-2 食物アレルギーの症状が起きた時期(症状)

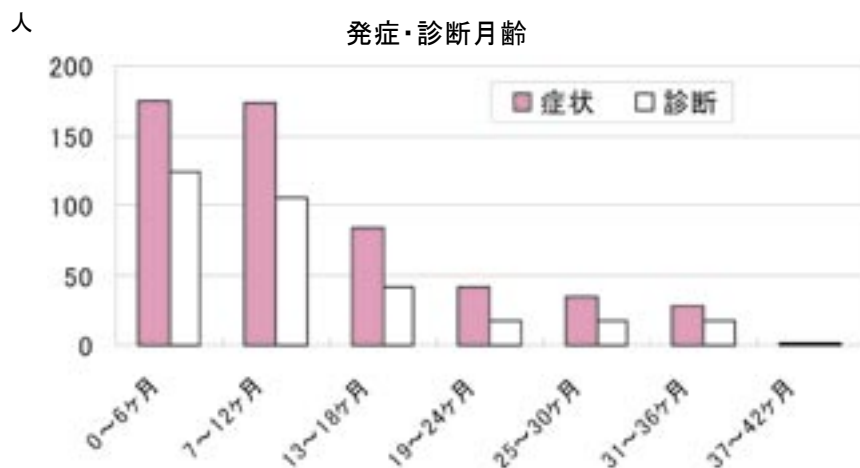
	(人数)	(割合)
0～6ヶ月	175	32.5%
7～12ヶ月	173	32.2%
13～18ヶ月	84	15.6%
19～24ヶ月	42	7.8%
25～30ヶ月	35	6.5%
31～36ヶ月	28	5.2%
37～42ヶ月	1	0.2%

表8-3 食物アレルギーの診断月齢

	(平均月齢)	(標準偏差)
性別	11.4	8.4
男	11.1	8.3
女	12.0	8.6

表8-4 食物アレルギーの診断時期

	(人数)	(割合)
0～6ヶ月	124	38.3%
7～12ヶ月	105	32.4%
13～18ヶ月	41	12.7%
19～24ヶ月	18	5.6%
25～30ヶ月	17	5.2%
31～36ヶ月	18	5.6%
37～42ヶ月	1	0.3%



⑨ 食物アレルギーの原因食物

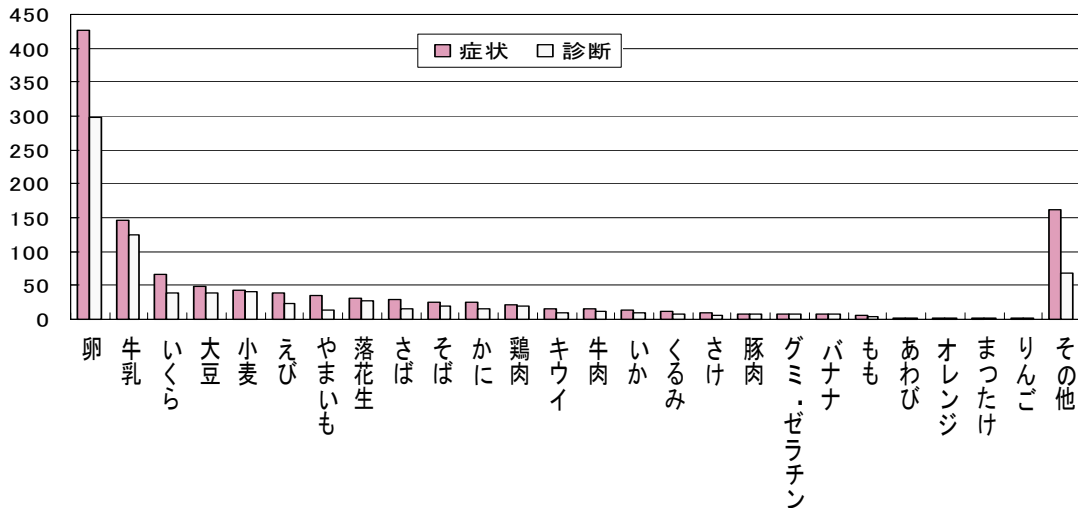
症状があった者、診断を受けた者ともに、卵が症状出現の原因食物として最も高く、次いで牛乳であった(表9-1、表9-2)。前回調査でも症状で同様の結果であった(前回調査(症状)1位 卵63.3%、2位 牛乳25.9%)。

(順位)	(食物)	(人数)	(割合)
1	卵	426	64.8%
2	牛乳	147	22.4%
3	いくら	67	10.2%
4	大豆	49	7.5%
5	小麦	42	6.4%
6	えび	38	5.8%
7	やまいも	35	5.3%
8	落花生	32	4.9%
9	さば	30	4.6%
10	そば	26	4.0%
10	かに	26	4.0%
12	鶏肉	22	3.3%
13	キウイ	16	2.4%
14	牛肉	15	2.3%
15	いか	14	2.1%
16	くるみ	12	1.8%
17	さけ	10	1.5%
18	豚肉	8	1.2%
19	グミ・ゼラチン	7	1.1%
19	バナナ	7	1.1%
21	もも	5	0.8%
22	あわび	2	0.3%
22	オレンジ	2	0.3%
24	まつたけ	1	0.2%
24	りんご	1	0.2%
	その他	162	24.7%

(順位)	(食物)	(人数)	(割合)
1	卵	299	83.8%
2	牛乳	125	35.0%
3	小麦	41	11.5%
4	いくら	39	10.9%
5	大豆	38	10.6%
6	落花生	27	7.6%
7	えび	24	6.7%
8	そば	20	5.6%
8	鶏肉	20	5.6%
10	かに	16	4.5%
11	さば	15	4.2%
12	やまいも	14	3.9%
13	牛肉	11	3.1%
14	いか	10	2.8%
15	キウイ	9	2.5%
16	くるみ	8	2.2%
17	豚肉	7	2.0%
17	グミ・ゼラチン	7	2.0%
17	バナナ	7	2.0%
20	さけ	6	1.7%
21	もも	3	0.8%
22	あわび	2	0.6%
22	オレンジ	2	0.6%
24	まつたけ	1	0.3%
24	りんご	1	0.3%
	その他	69	19.3%

人

食物アレルギー原因物質



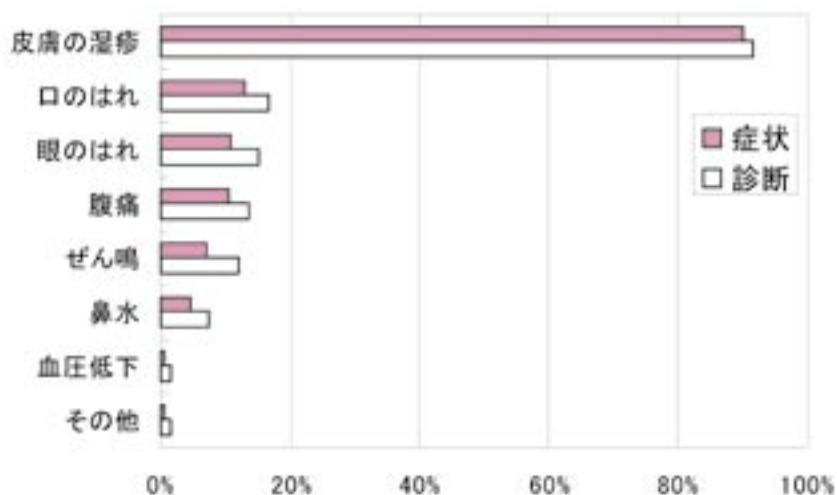
⑩ 食物アレルギーで出現した症状

症状があった者、診断を受けた者ともに出現した症状では皮膚の湿疹の割合が高かった(表 10-1、表 10-2)。前回調査でも症状で同様の結果であった。

			(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
皮膚の湿疹	592	90.1%	347	84.8%
口のはれ	85	12.9%	41	10.0%
眼のはれ	71	10.8%	45	11.0%
腹痛	69	10.5%	34	8.3%
ぜん鳴	47	7.2%	23	5.6%
鼻水	30	4.6%	15	3.7%
血圧低下	5	0.8%	4	1.0%
その他	5	0.8%	28	6.8%

	(人数)	(割合)
皮膚の湿疹	327	91.6%
口のはれ	60	16.8%
眼のはれ	54	15.1%
腹痛	49	13.7%
ぜん鳴	43	12.0%
鼻水	27	7.6%
血圧低下	5	1.4%
その他	5	1.4%

食物アレルギーで発現した症状



⑪ 食物アレルギーに対する制限・除去食への対応

現在、食物の制限・除去をしている者は、症状のある者で 37.6%、診断を受けた者で 49.3%であった(表 11-1、表 11-2)。現在または過去に制限・除去をした者のうち 4 割弱が診断を受けていなかった(表 11-3、表 11-4)。

表 11-1 食物アレルギーに対する制限・除去食への対応(症状)

	(人数)	(割合)
現在も除去・制限	247	37.6%
過去にしていたが今はしていない	313	47.6%
したことがない	89	13.5%
不明	8	1.2%

表 11-2 食物アレルギーに対する制限・除去食への対応(診断)

	(人数)	(割合)
現在も除去・制限	176	49.3%
過去にしていたが今はしていない	163	45.7%
したことがない	15	4.2%
不明	3	0.8%

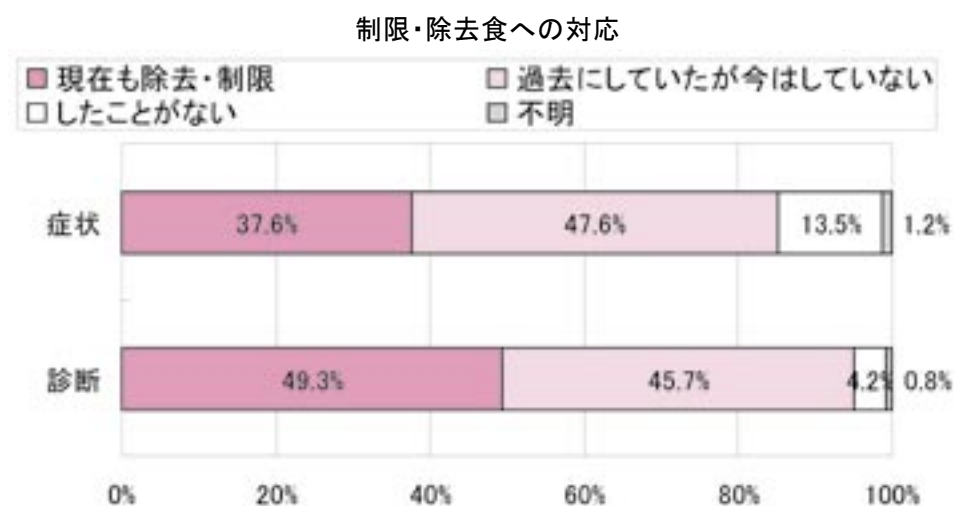


表 11-3 食物アレルギーの診断の有無(現在も除去・制限)

	(人数)	(割合)
診断あり	176	72.7%
診断なし	66	27.3%

表 11-4 食物アレルギーの診断の有無(過去にしていたが今はしていない)

	(人数)	(割合)
診断あり	163	53.1%
診断なし	144	46.9%

⑫ アトピー性皮膚炎の症状と診断

男子は女子に比べて、症状と診断の割合が高かった(表 12-1、表 12-3)。地域差は特に認めていない(表 12-2、表 12-4)。前回調査でも症状で同様の結果であった。

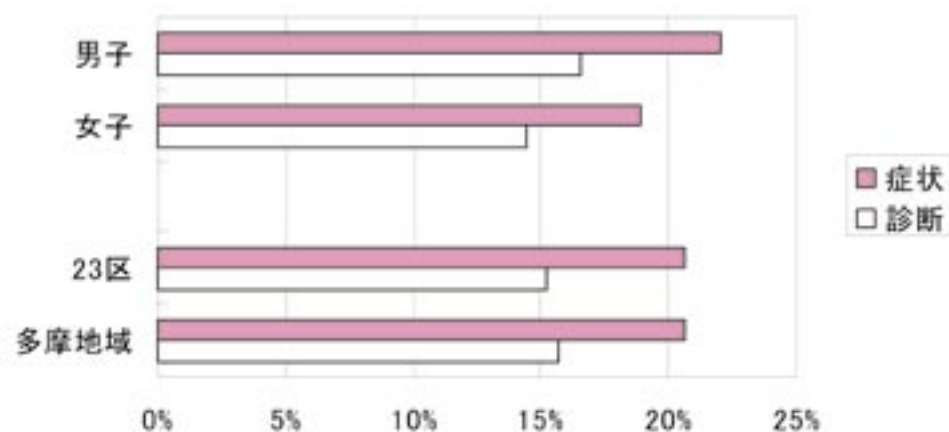
	(人数) (割合)		(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
性別	831		775	
男子	463	22.0%	434	19.7%
女子	368	18.9%	338	16.1%

	(人数) (割合)		(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
地区	831		775	
23区	540	20.6%	466	17.4%
多摩地域	288	20.6%	308	18.9%
島しょ	2			
不明	1			

	(人数) (割合)	
	(人数)	(割合)
性別	618	
男子	345	16.5%
女子	273	14.4%

	(人数) (割合)	
	(人数)	(割合)
地区	618	
23区	396	15.2%
多摩地域	221	15.7%
島しょ	1	
不明		

アトピー性皮膚炎の症状と診断 性別／地区 別



⑬ アレルギー性鼻炎の症状と診断

前回調査では症状において地域差(P<0.05)を認めたが、今回調査では男女差、地域差は特に認めなかった(表 13-1、表 13-3、表 13-2、表 13-4)。

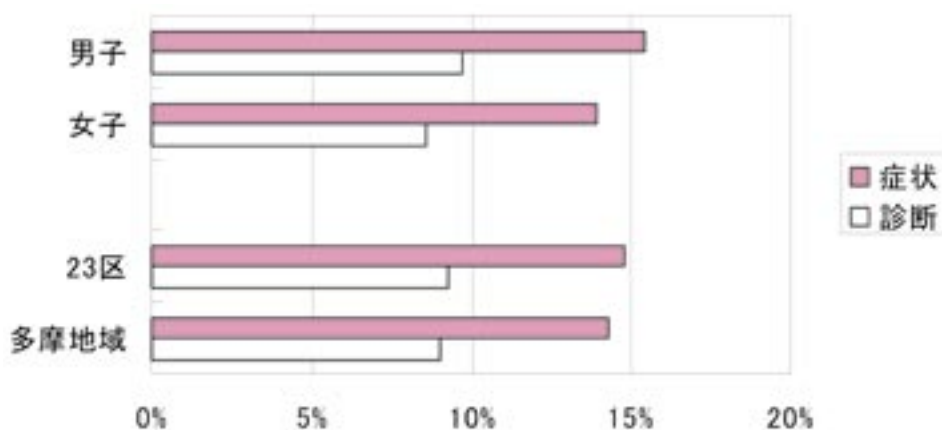
	今回調査		(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
性別	581		326	
男子	318	15.4%	174	7.8%
女子	263	13.9%	151	7.1%

地区	今回調査		(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
地区	581		326	
23区	381	14.8%	181	6.7%
多摩地域	195	14.2%	144	8.8%
島しょ	3			
不明	2			

性別	今回調査	
	(人数)	(割合)
性別	365	
男子	201	9.7%
女子	164	8.6%

地区	今回調査	
	(人数)	(割合)
地区	365	
23区	239	9.3%
多摩地域	124	9.0%
島しょ	1	
不明	1	

アレルギー性鼻炎の症状と診断 性別/地区別



⑭ アレルギー性結膜炎の症状と診断

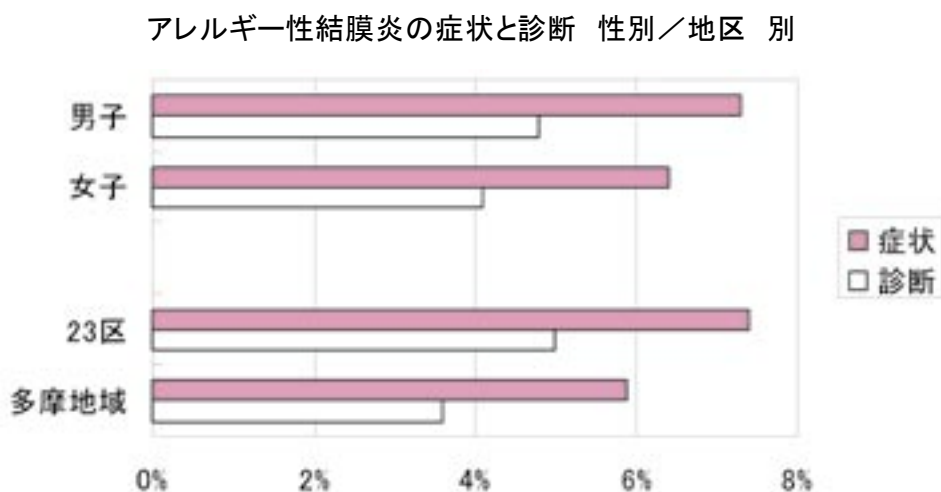
前回調査(症状)では男女差、地域差は特に認めなかったが、今回調査では診断で地域差を認めた(表 14-4)。

	表		(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
性別	270		222	
男子	150	7.3%	121	5.4%
女子	120	6.4%	100	4.7%

	表		(参考)前回調査	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
地区全体	270		222	
23区	190	7.4%	146	6.7%
多摩地域	79	5.9%	74	8.8%
島しょ	0			
不明	1			

	表	
	(人数)	(割合)
性別	177	
男子	99	4.8%
女子	78	4.1%

	表	
	(人数)	(割合)
地区	177	
23区	129	5.0%
多摩地域	48	3.6%
島しょ	0	
不明		



(3) 生活環境及び生活習慣

① 寝室の床の材質

寝室の床の材質は、49.4%が畳、29.9%がフローリング・ビニールタイル、19.4%がじゅうたんであった(表 15-1)。前回調査と比べると畳の割合が減少し、フローリング・ビニールタイルの割合が増加していた。アレルギー性疾患との関連は、前回調査では特に関連は認められなかったが、今回調査ではアトピー性皮膚炎(症状)で、じゅうたんなしの割合が高かった(表 15-3)。

表 15-1 寝室の床の材質

じゅうたん		フローリング ・ビニールタイル		畳		その他	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
813	19.4%	1252	29.9%	2070	49.4%	53	1.3%
前回調査(質問: 同じ 回答: 同じ)							
920	21.1%	777	17.8%	2597	59.4%	76	1.7%

寝室の床の材質

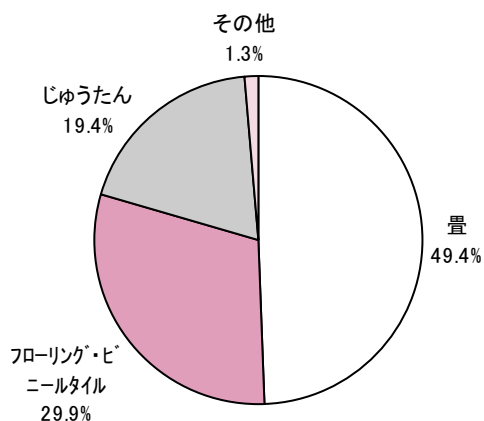


表 15-2 寝室の床の材質(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	じゅうたん		フローリング ・ビニールタイル		畳		その他	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	802		1232		2038		53	
あり	161	20.3%	239	30.1%	385	48.5%	8	1.0%
なし	641	19.2%	993	29.8%	1653	49.6%	45	1.4%
不明	11		20		32			

表 15-3 寝室の床の材質(アトピー性皮膚炎の症状) (p<0.05)

	じゅうたん		フローリング ・ビニールタイル		畳		その他	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	764		1196		1928		51	
あり	127	15.7%	263	32.5%	410	50.7%	8	1.0%
なし	637	20.3%	933	29.8%	1518	48.5%	43	1.4%
不明	49		56		142		2	

アトピー性皮膚炎と寝室の床の材質

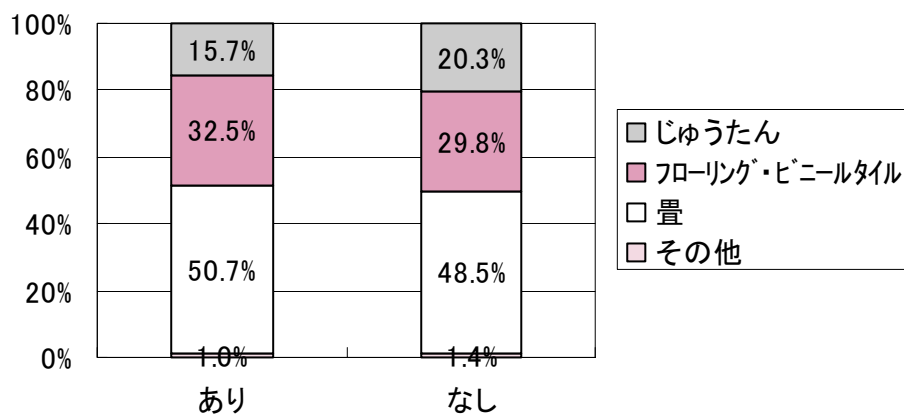


表 15-4 寝室の床の材質(アレルギー性鼻炎の症状)

	じゅうたん		フローリング ・ビニールタイル		畳		その他	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	756		1164		1888		50	
あり	110	19.5%	178	31.6%	267	47.4%	8	1.4%
なし	646	19.6%	986	29.9%	1621	49.2%	42	1.3%
不明	57		88		182		3	

② 寝室の床の掃除頻度

寝室の床の掃除頻度は、週2～6回が56.9%と最も高く、週7回以上が21.0%、週1回以下が22.0%であった(表16-1)。前回調査と比べて週7回以上の割合が減り、週1回以下の割合が増加した。アレルギー性疾患との関連は、前回調査では、ぜん息・ぜん鳴(症状)で週7回以上の割合が高かったが、今回調査ではぜん息・ぜん鳴、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎との関連は特にみられなかった(表16-2、表16-3、表16-4)。

表16-1 掃除の頻度

週1回以下		週2～6回		週7回以上	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
923	22.0%	2382	56.9%	881	21.0%
前回調査(質問:寝室の掃除かけ、回答:週()回程度)					
602	13.8%	2567	59.1%	1173	27.0%

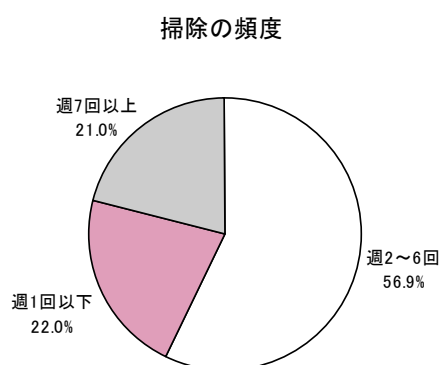


表16-2 掃除の頻度(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	週1回以下		週2～6回		週7回以上	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	909		2352		863	
あり	200	25.0%	438	54.8%	161	20.2%
なし	709	21.3%	1914	57.6%	702	21.1%
不明	14		438		18	

表16-3 掃除の頻度(アトピー性皮膚炎の症状)

	週1回以下		週2～6回		週7回以上	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	879		2233		825	
あり	191	23.6%	442	54.5%	178	21.9%
なし	688	22.0%	1791	57.3%	647	20.7%
不明	44		149		56	

表16-4 掃除の頻度(アレルギー性鼻炎の症状)

	週1回以下		週2～6回		週7回以上	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	863		2188		808	
あり	136	24.1%	307	54.3%	122	21.6%
なし	727	22.1%	1881	57.1%	686	20.8%
不明	60		194		73	

③ 寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度

週1回以下が55.9%と最も高く、週2～6回が41.3%であった(表17-1)。前回調査と比べて週1回以下の割合が増加した。アレルギー性疾患との関連は、特にみられなかった(表17-2、表17-3、表17-4)。前回調査ではぜん息症状を持つの方が持たないものに比べ寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度が高かった。

表17-1 寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度

週1回以下		週2～6回		週7回以上	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
2291	55.9%	1694	41.3%	116	2.8%
前回調査(質問:同じ、回答:頻度を選択)					
週1回以下		週2～3回		週4回以上	
1661	37.9%	1947	44.4%	775	17.7%

寝具の天日干し、布団乾燥機かけ

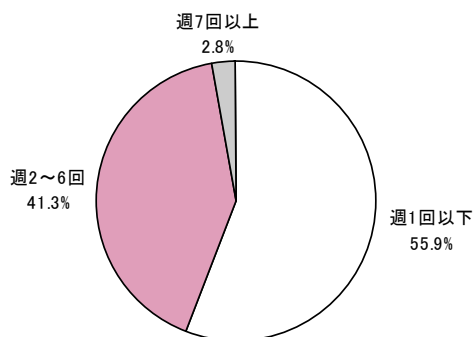


表17-2 寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	週1回以下		週2～6回		週7回以上	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	2256		1672		113	
あり	448	57.7%	313	40.3%	15	1.9%
なし	1808	55.4%	1359	41.6%	98	3.0%
(不明)	35		22		3	

表17-3 寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度(アトピー性皮膚炎の症状)

	週1回以下		週2～6回		週7回以上	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	2161		1595		107	
あり	466	58.4%	304	38.1%	28	3.5%
なし	1695	55.3%	1291	42.1%	79	2.6%
不明	130		99		9	

表17-4 寝具の天日干し、布団乾燥機かけの頻度(アレルギー性鼻炎の症状)

	週1回以下		週2～6回		週7回以上	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	2113		1562		108	
あり	316	56.8%	223	40.1%	17	3.1%
なし	1797	55.7%	1339	41.5%	91	2.8%
不明	178		132		8	

④ 室内の定期的な換気

定期的な換気が 80.3%と最も高かった(表 18-1)。アレルギー性疾患との関連は、特にみられなかった(表 18-2、表 18-3、表 18-4)。

表 18-1 室内の換気

定期的な換気		気づいた時に換気		特にしていない	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
3378	80.3%	763	18.1%	66	1.6%
前回調査なし					

室内の換気

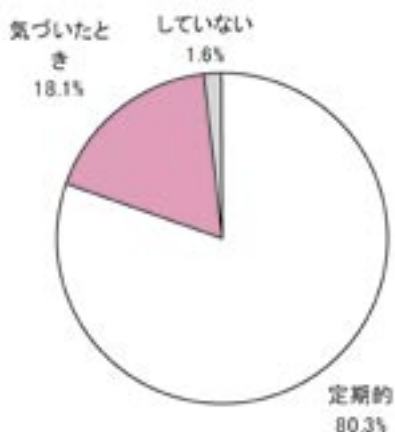


表 18-2 室内の換気(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	定期的な換気		気づいた時に換気		特にしていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	3327		752		66	
あり	630	78.6%	159	19.8%	13	1.6%
なし	2697	80.7%	593	17.7%	53	1.6%
不明	51		11			

表 18-3 室内の換気(アトピー性皮膚炎の症状)

	定期的な換気		気づいた時換気		特にしていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	3167		730		61	
あり	640	78.3%	162	19.8%	15	1.8%
なし	2527	80.5%	568	18.1%	46	1.5%
不明	211		33		5	

表 18-4 室内の換気(アレルギー性鼻炎の症状)

	定期的な換気		気づいた時換気		特にしていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	3108		707		62	
あり	464	81.7%	94	16.5%	10	1.8%
なし	2644	79.9%	613	18.5%	52	1.6%
不明	270		56		4	

⑤ 家の造り

鉄筋・鉄骨が64.1%と最も高かった(表19-1)。アレルギー性疾患との関連は、特にみられなかった(表19-2、表19-3、表19-4)。前回調査でも同様の結果であった。

表19-1 家の造り

木造		鉄筋・鉄骨		その他	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
1452	35.2%	2644	64.1%	29	0.7%
前回調査(質問:同じ、回答:同じ)					
1426	32.9%	2816	64.9%		

家の造り

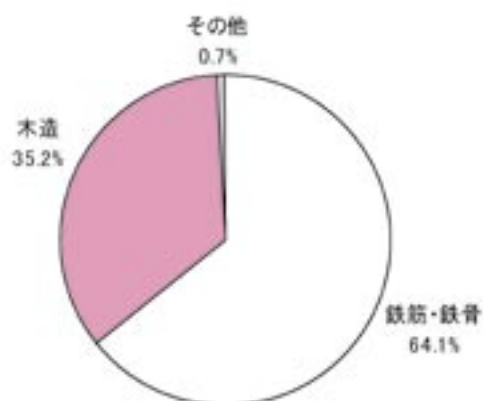


表19-2 家の造り(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	木造		鉄筋・鉄骨		その他	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1419		2617		29	
あり	260	32.7%	516	65.0%	5	0.6%
なし	1159	35.3%	2101	64.0%	24	0.7%
不明	33		27			

表19-3 家の造り(アトピー性皮膚炎の症状)

	木造		鉄筋・鉄骨		その他	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1368		2486		28	
あり	282	35.6%	505	63.8%	5	0.6%
なし	1086	35.1%	1981	64.1%	23	0.7%
不明	84		158		1	

表19-4 家の造り(アレルギー性鼻炎の症状)

	木造		鉄筋・鉄骨		その他	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1332		2447		26	
あり	194	34.8%	357	64.0%	7	1.3%
なし	1138	35.0%	2090	64.4%	19	0.6%
不明	120		197		3	

⑥ 同居人の喫煙状況

「吸わない」が45.8%と最も高かった(表20-1)。前回調査と比べて吸う者の割合は減少を認めた。アレルギー性疾患との関連は、ぜん息・ぜん鳴(症状)で、吸わない者の割合が低かった(表20-2)。ぜん息・ぜん鳴、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎の症状で見ると約4分の1で同居人の喫煙を認めた(表20-2、表20-3、表20-4)。

表20-1 同居人の喫煙状況

吸う		子供の前では吸わない		吸わない	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
1081	25.7%	1201	28.5%	1925	45.8%
前回調査(質問:同じ、回答:「子どもの前では吸わない」は「吸わない」に含める)					
1868	42.5%			2525	57.5%

同居人の喫煙率

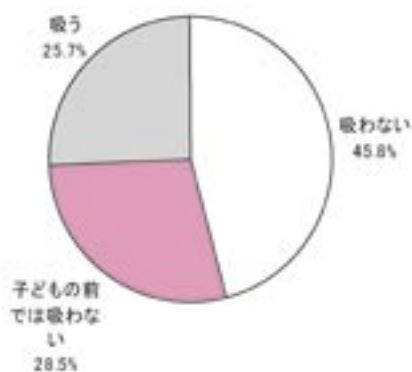


表20-2 同居人の喫煙状況(ぜん息・ぜん鳴の症状) (p<0.05)

	吸う		子供の前では吸わない		吸わない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1067		1178		1901	
あり	230	28.6%	240	29.9%	333	41.5%
なし	837	25.0%	938	28.1%	1568	46.9%
不明	14		23		24	

ぜん息と同居人の喫煙状況

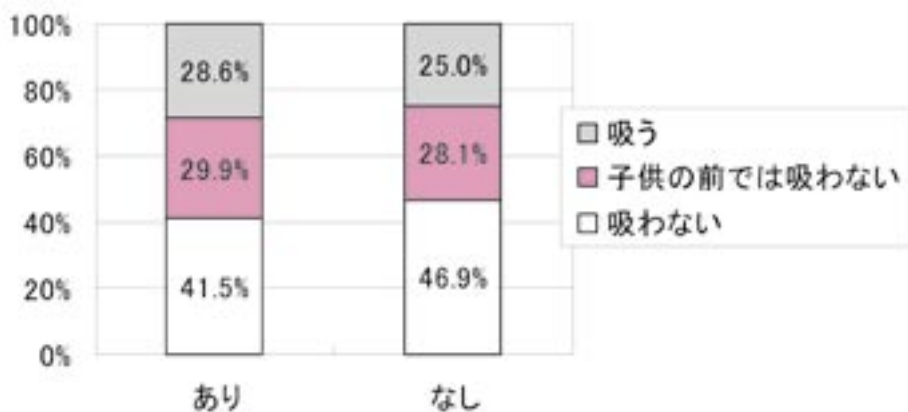


表 20-3 同居人の喫煙状況(アトピー性皮膚炎の症状)

	吸う		子供の前では 吸わない		吸わない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1006		1133		1819	
あり	208	25.5%	224	27.5%	383	47.0%
なし	798	25.4%	909	28.9%	1436	45.7%
不明	75		68		106	

表 20-4 同居人の喫煙状況(アレルギー性鼻炎の症状)

	吸う		子供の前では 吸わない		吸わない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	987		1109		1783	
あり	154	27.1%	154	27.1%	261	45.9%
なし	833	25.2%	955	28.9%	1522	46.0%
不明	94		92		142	

⑦ 授乳方法

生後3ヶ月までの授乳方法は、母乳が46.0%と最も高かった(表21-1)。アレルギー性疾患との関連は、食物アレルギー(症状)とアトピー性皮膚炎(症状)で、母乳の割合が高かった(表21-3、表21-4)。前回調査でも同様に食物アレルギー(症状)とアトピー性皮膚炎(症状)で、母乳の割合が高かった。

表 21-1 授乳方法

母乳		混合		ミルク	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
1937	46.0%	1762	41.9%	509	12.1%
前回調査(質問:同じ、回答:同じ)					
1847	42.1%	1902	43.3%	642	14.6%

授乳方法

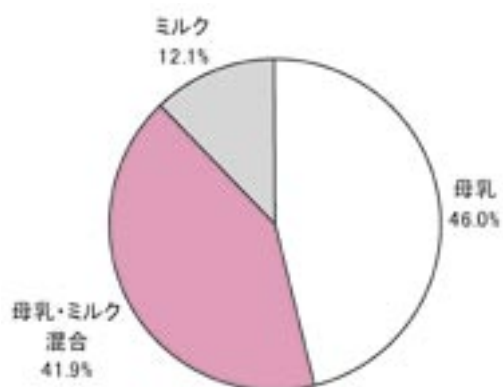


表 21-2 授乳方法(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	母乳		混合		ミルク	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1906		1738		503	
あり	359	44.7%	332	41.3%	112	13.9%
なし	1547	46.3%	1406	42.0%	391	11.7%
不明	31		24		6	

表 21-3 授乳方法(食物アレルギーの症状) (p<0.01)

	母乳		混合		ミルク	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1908		1732		501	
あり	344	53.1%	241	37.2%	63	9.7%
なし	1564	44.8%	1491	42.7%	438	12.5%
不明	29		30		8	

食物アレルギーと授乳方法

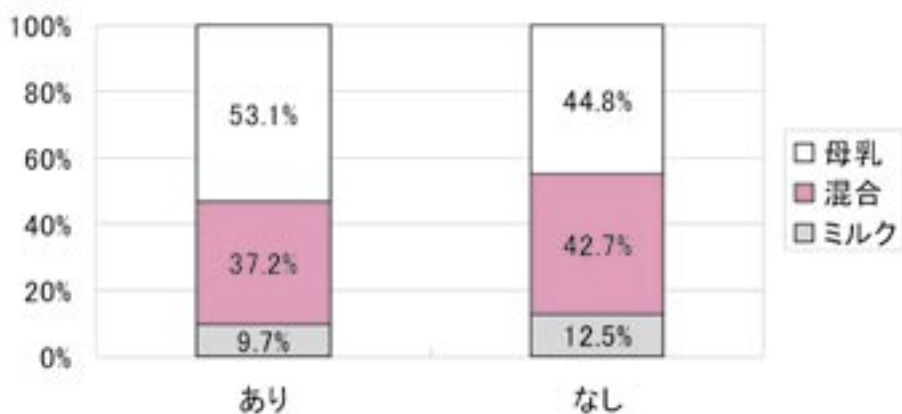


表 21-4 授乳方法(アトピー性皮膚炎の症状) (p<0.01)

	母乳		混合		ミルク	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1840		1644		475	
あり	418	51.2%	305	37.4%	93	11.4%
なし	1422	45.2%	1339	42.6%	382	12.2%
不明	97		118		34	

アトピー性皮膚炎と授乳方法

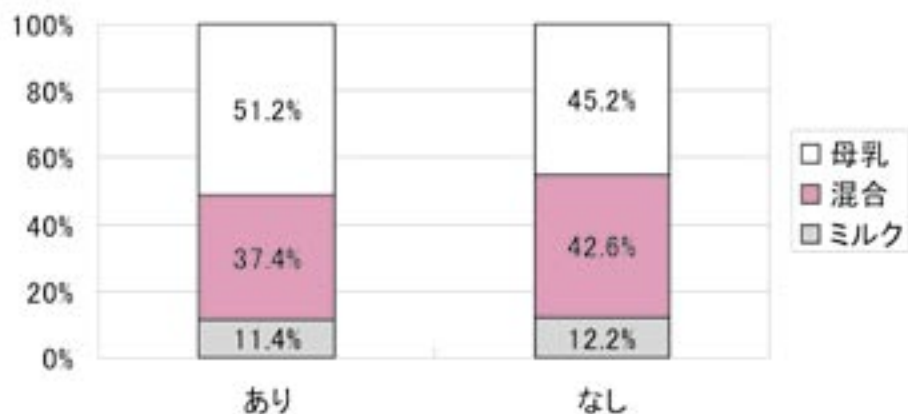


表 21-5 授乳方法(アレルギー性鼻炎の症状)

	母乳		混合		ミルク	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1790		1617		471	
あり	258	45.4%	248	43.7%	62	10.9%
なし	1532	46.3%	1369	41.4%	409	12.4%
不明	147		145		38	

表 21-6 授乳方法(アレルギー性結膜炎の症状)

	母乳		混合		ミルク	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1782		1594		464	
あり	120	44.9%	113	42.3%	34	12.7%
なし	1662	46.5%	1481	41.4%	430	12.0%
不明	155		168		45	

⑧ 保育園・幼稚園の通園状況

保育園、幼稚園に通園している割合は、30.3%であった(表 22-1)。アレルギー性疾患との関連は、ぜん息・ぜん鳴(症状)、アトピー性皮膚炎(症状)、アレルギー性鼻炎(症状)で通園の割合が高かった(表 22-2、表 22-4、表 22-5)。各アレルギー性疾患(ぜん息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎)の症状を有する者のうち、約3分の1で集団保育が実施されていた(表 22-2、表 22-3、表 22-4、表 22-5、表 22-6)。集団保育を受けている者の中では、これまでに何らかのアレルギーの症状のあった者の割合が57.8%であった。(表 22-7)。

表 22-1 集団保育

通っている		通っていない	
(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
1265	30.3%	2915	69.7%
前回調査なし			

集団保育



表 22-2 集団保育(ぜん息・ぜん鳴の症状) (p<0.01)

	通っている		通っていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1245		2875	
あり	310	39.0%	485	61.0%
なし	935	28.1%	2390	71.9%
不明	20		40	

ぜん息と集団保育

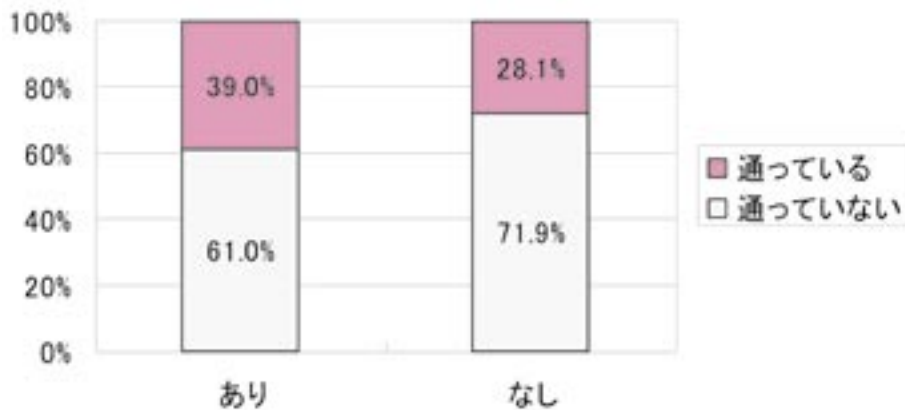


表 22-3 集団保育(食物アレルギーの症状)

	通っている		通っていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1239		2874	
あり	192	30.0%	447	70.0%
なし	1047	30.1%	2427	69.9%
不明	26		41	

表 22-4 集団保育(アトピー性皮膚炎の症状) (p<0.01)

	通っている		通っていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1180		2755	
あり	283	34.8%	530	65.2%
なし	897	28.7%	2225	71.3%
不明	85		160	

アトピー性皮膚炎と集団保育

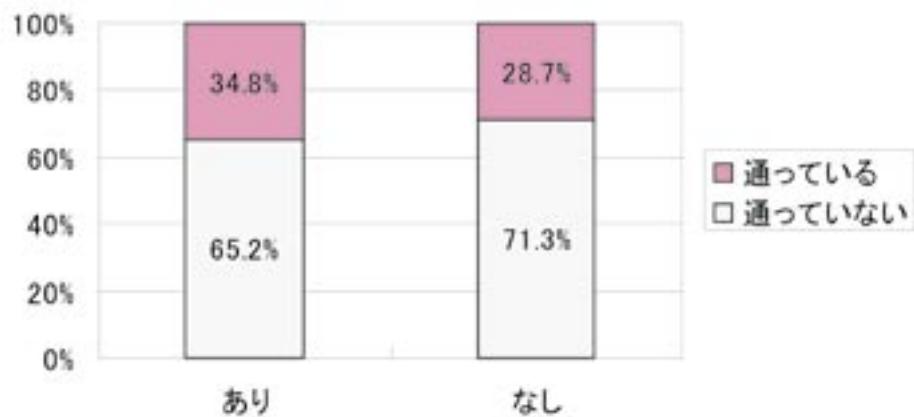


表 22-5 集団保育(アレルギー性鼻炎の症状) (p<0.01)

	通っている		通っていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1152		2700	
あり	201	36.0%	357	64.0%
なし	951	28.9%	2343	71.1%
不明	113		215	

アレルギー性鼻炎と集団保育

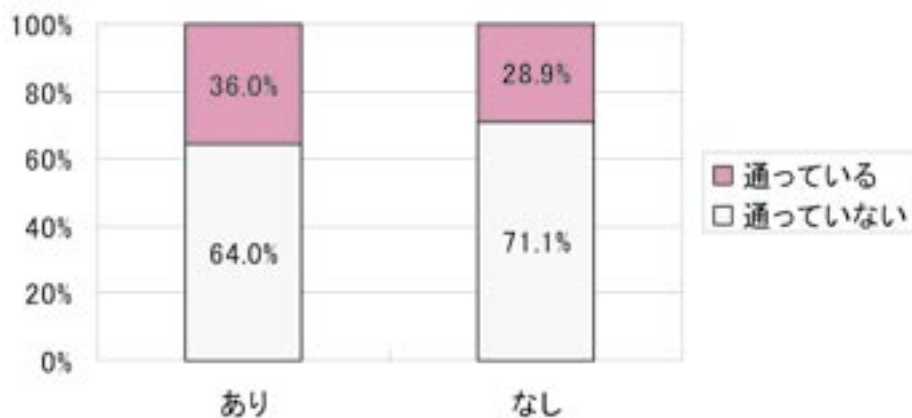


表 22-6 集団保育(アレルギー性結膜炎の症状)

	通っている		通っていない	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
計	1140		2677	
あり	89	33.6%	176	66.4%
なし	1051	29.6%	2501	70.4%
不明	125		238	

表 22-7 各アレルギー性疾患との関連 (集団保育を受けている者)

	症状あり		症状なし	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
ぜん息・ぜん鳴	310	24.9%	935	75.1%
食物アレルギー	192	15.5%	1047	84.5%
アトピー性皮膚炎	283	24.0%	897	76.0%
アレルギー性鼻炎	201	17.4%	951	82.6%
アレルギー性結膜炎	89	7.8%	1051	92.2%
何らかのアレルギー	730	57.8%	532	42.2%

⑨ 室内におけるペットの飼育状況

室内において、なんらかのペットを飼育している人は、出生時、現在とも約 16%前後であった。その中でも、犬が最も多く、次に猫であった(表 23-1)。アレルギー性疾患との関連は、特にみられなかった(表 23-2、表 23-3、表 23-4)。

表 23-1 室内におけるペットの飼育状況 複数回答

	出生時		現在	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
犬	205	5.1%	141	3.5%
猫	202	5.0%	136	3.4%
ハムスター等	66	1.6%	46	1.1%
ウサギ	25	0.6%	15	0.4%
鳥	44	1.1%	33	0.8%
その他	100	2.5%	337	8.4%
飼っていない	3448	85.5%	3367	83.5%

前回調査と比べ内容を大幅変更

表 23-2 ペットの飼育状況(ぜん息・ぜん鳴の症状)

	出生時		現在	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
犬	47	6.1%	26	3.4%
猫	37	4.8%	25	3.2%
ハムスター等	19	2.5%	8	1.0%
ウサギ	3	0.4%	1	0.1%
鳥	9	1.2%	7	0.9%
その他	25	3.2%	70	9.1%
飼っていない	643	83.2%	642	83.1%

表 23-3 ペットの飼育状況(アトピー性皮膚炎の症状)

	出生時		現在	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
犬	39	5.0%	25	3.2%
猫	35	4.5%	21	2.7%
ハムスター等	14	1.8%	7	0.9%
ウサギ	3	0.4%	1	0.1%
鳥	6	0.8%	3	0.4%
その他	19	2.4%	69	8.8%
飼っていない	676	86.0%	662	84.5%

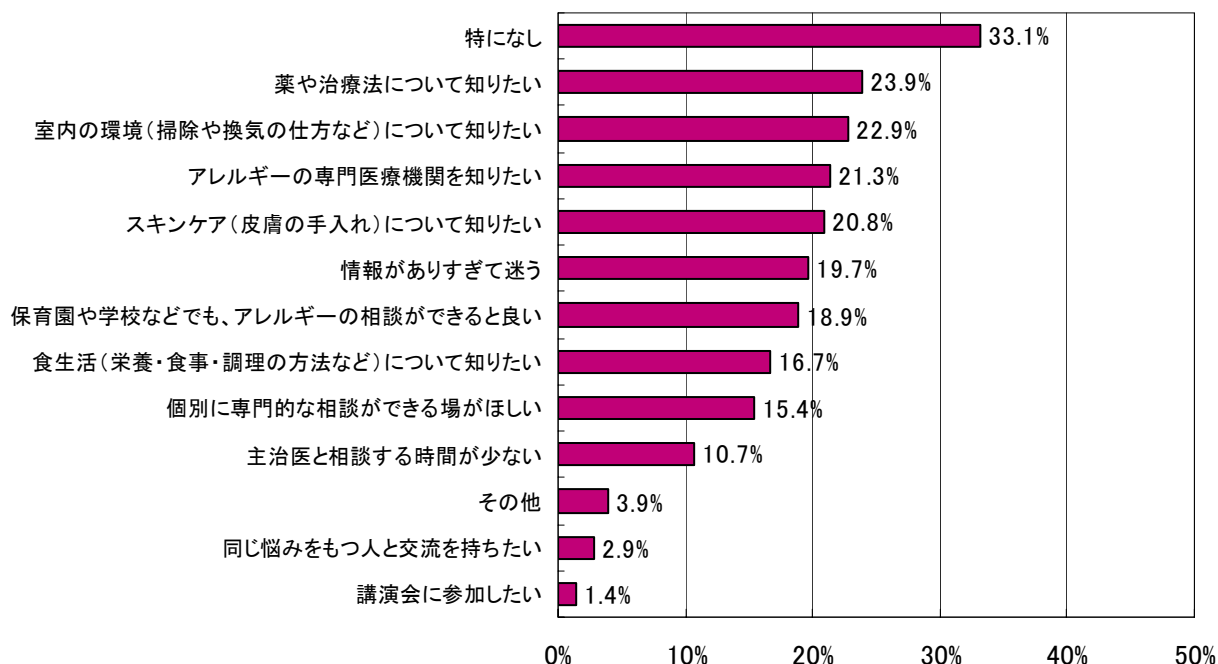
表 23-4 ペットの飼育状況(アレルギー性鼻炎の症状)

	出生時		現在	
	(人数)	(割合)	(人数)	(割合)
犬	30	5.5%	18	3.3%
猫	24	4.4%	13	2.4%
ハムスター等	9	1.6%	4	0.7%
ウサギ	4	0.7%	2	0.4%
鳥	1	0.2%	3	0.6%
その他	17	3.1%	53	9.7%
飼っていない	467	85.5%	454	83.5%

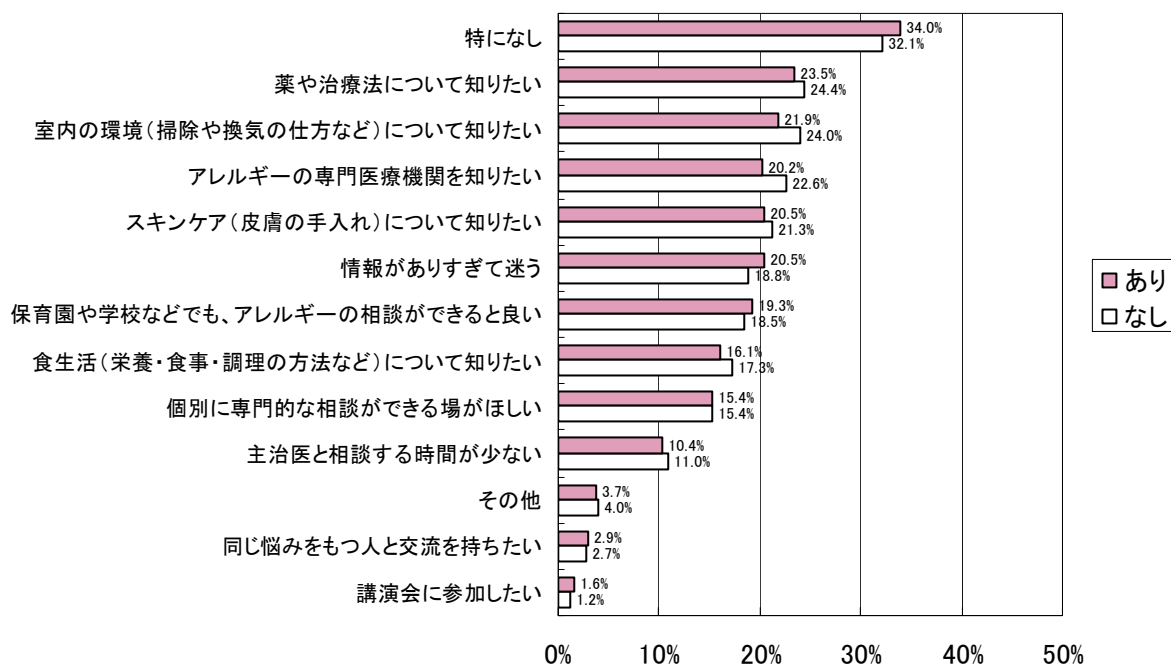
(4) アレルギー性疾患に関する意見・要望

「薬や治療法について知りたい (23.9%)」、「室内の環境 (掃除や換気の仕方など) について知りたい (22.9%)」という意見が多くみられた。アレルギー性疾患の有無に関わらず意見・要望が寄せられていた。自由記載の意見では、周囲の理解やアレルギー性疾患患者への学校や保育所等での個別対応、相談体制の充実、受診しやすい体制、費用の公的補助についてなど内容は多岐にわたっていた。

アレルギーに関する意見・要望(全体)



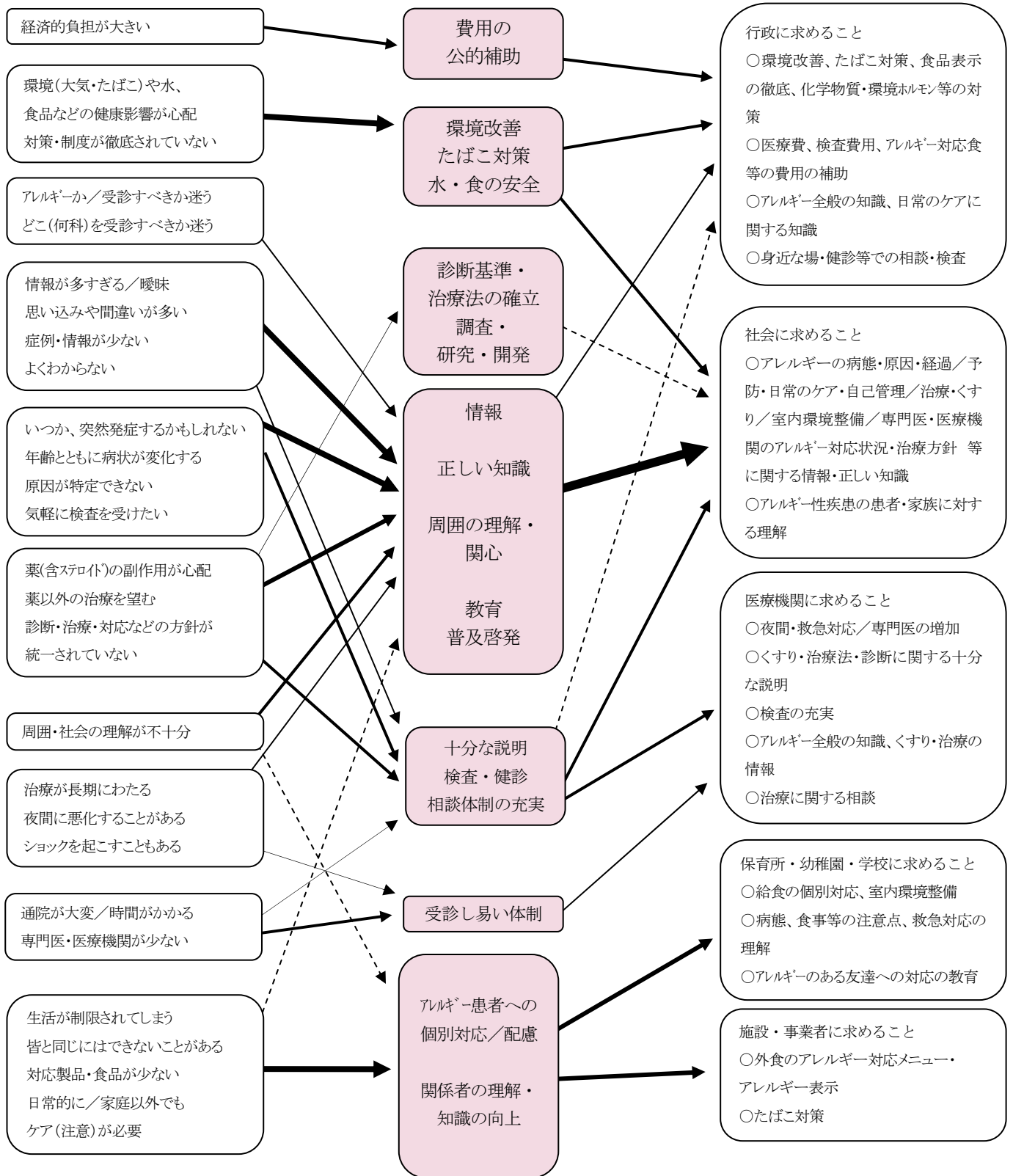
アレルギーに関する意見・要望(何らかのアレルギーあり・なし)



アレルギーに関する現状

要望

要望の詳細



第3章 調査のまとめ

第3章 調査のまとめ

(1) アレルギー性疾患の罹患状況

① アレルギー性疾患全体について

今回の調査では、都内の3歳児のうち、これまでに何らかのアレルギーの症状のあった者が51.5%、診断を受けた者が36.7%であった。前回（平成11年度）の調査と比較すると、この5年間で症状があった者の割合は約10ポイント増加していたが、診断を受けた者の割合はほとんど変わらなかった。

② 各アレルギー性疾患の概要について

各疾患別に見た場合、いずれのアレルギー性疾患においても症状のあった者の割合は増加している。症状のあった者の割合が大きく増加したのは、ぜん息、食物アレルギー、アレルギー性鼻炎（花粉症含む）である。この3疾患は診断を受けた者の割合についても増加している。ただし、ぜん息の症状については、前回の調査と今回とで質問文を変更した（前回調査で用いた「発作」という言葉が一般には重症のイメージであることを考慮し、「症状」という言葉に変更して質問した。）ため単純比較はできない。

アトピー性皮膚炎については、症状のあった者が20.5%、診断を受けた者が15.3%であった。前回調査と比べて診断の割合は微減していた。

ア 食物アレルギーについて

食物アレルギーについては、症状を起こしたことがある者が15.6%（約6人に1人）、診断を受けた者が8.5%であった。前回調査と比べ、症状で約1.7倍、診断で約1.2倍増加していた。発症・診断の時期については1歳以前が6～7割と高かった。

症状を起こした者のうち、原因と思われる食物としては、卵（64.8%）、牛乳（22.4%）、いくら（10.2%）が多く、次いで大豆（7.5%）、小麦（6.4%）の順であった。診断を受けた者では、卵、牛乳、小麦の順で多かった。

症状は、皮膚の湿疹が9割であったが、ぜん息や呼吸困難などの呼吸器症状も7.2%に見られ、血圧低下などのショック症状も少数ではあるが5人（0.8%）に認めている。

症状を起こしたことがある者のうち8割以上が現在または過去に保護者等による食事制限・除去を行ったことがあったが、そのうち診断を受けていない者が4割弱おり、自己判断によると思われる食事制限・除去が高頻度に行われていることが明らかになった。食物アレルギーに対する食事制限・除去については、医師の指示のもと、必要最小限の範囲で行われるようサポートすることが大切である。

イ アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）について

アレルギー性鼻炎（特にスギ花粉症）の増加は「鼻アレルギー診療ガイドライン」¹⁾においても指摘されており、発症の若年化傾向も報告されている。

今回の調査でも、症状があった者の割合が14.6%と2倍近く増加し、診断を受けた者の割合も9.2%と1.5倍に増加していた。花粉症を含めたアレルギー性鼻炎は、3歳までの乳幼児期においても増加しており、若年化傾向が認められたと言える。

花粉症を含めたアレルギー性鼻炎の代表的なアレルゲン（抗原）としてはダニ、ハウスダスト、花粉があげられている。発症予防と症状の悪化防止のために、アレルゲンを除去・回避するための対策の必要性が再確認された。

③ アレルギー性疾患の合併及び遺伝について

アレルギー性疾患の合併状況については、前回調査と同様に、症状、診断ともに他のアレルギー性疾患を高頻度に合併していることがわかった。特に食物アレルギーと診断された者でアトピー性皮膚炎を併発している者は64.9%と高く、アレルギー性結膜炎と診断された者でアレルギー性鼻炎を併発している者も47.8%と高かった。

また、アレルギー性疾患の診断を受けた3歳児の両親は、同じ疾患を高頻度で罹患していることがわかり、前回調査同様、アレルギー性疾患の発症に遺伝的要因があることが示唆される結果であった。

アレルギー性疾患を個人の問題あるいは一時期の問題ととらえるのではなく、いわゆるアレルギーマーチ^{*}への考慮や家族単位での対応の必要性について理解することが大切である。

^{*}アレルギー体質を持つ人に、アレルギー性疾患が次から次へと姿を変えてあらわれてくることがある（例えば、乳幼児期はアトピー性皮膚炎、年齢が増すとぜん息、学童期にアレルギー性鼻炎、というように）。これをアレルギーマーチと呼ぶ。

④ アレルギーの症状があった者の診断の状況について

何らかのアレルギーの症状があった者のうち診断を受けた者の割合は、今回の調査では7割であり、前回調査の9割に比べて低下した。

このことから、アレルギーの症状があっても診断を受けていない者が増加していると考えられるが、この理由については明らかでない。

厚生労働省の調査²⁾によると、皮膚・呼吸器・目鼻のいずれかのアレルギー様症状のあった0～4歳児のうち、医療機関に入通院している者は約9割、アレルギーの診断を受けた者は約5割であった。今後、調査を実施する際には、アレルギーの症状のとらえ方や受診の有無なども把握する必要がある。

一方、アレルギーの症状を持つ患者・家族が自己判断で対応している可能性も否定できない。アレルギー性疾患は慢性疾患であり長期管理を要することが多いため、適切な診断のもとに継続して治療を受けることが重要である。アレルギーに関する情報が氾濫する中、症状を持つ患者・家族の迷いを整理し、適切な受診（または治療の継続）を支援する必要がある。そのためには、地域の保健所・保健センターや子育て支援機関等における相談機能が果たす役割は大きい。

同時に、適切な診断・治療がアレルギー専門医に限らず身近なかかりつけ医においても実施されるよう、診療ガイドライン等の普及も重要な課題である。

(2) 生活環境及び生活習慣

生活環境及び生活習慣についてみると、寝室の床の材質に関しては、アトピー性皮膚炎の症状があった者でじゅうたんの割合が低く、床の材質に配慮している傾向がみられた。

しかし、同居人の喫煙状況に関しては、ぜん息・ぜん鳴の症状があった者で、「同居人で喫煙する者はいない」との回答の割合が低いという結果であった。全体では、前回調査と比較して「(子どもの前でも)吸う者がいる」との回答の割合は減少したものの、子どもにアレルギー性疾患があっても、約1/4の家庭では未だ子どもの前でも同居人が喫煙しており、受動喫煙の害への理解や配慮が不十分であることが示唆された。

それ以外の項目に関しては、今回の調査ではアレルギー性疾患との明らかな関連はみられなかったが、掃除や寝具の乾燥などはアレルギー性疾患の自己管理として重要であるため、家族の理解・協力が得られるよう、相談や保健指導を充実していく必要がある。

今回の調査では、3歳児の30.3%が保育施設等に通っており、そのうちの57.8%に何らかのアレルギー性疾患の症状があったことがわかった。アレルギー性疾患は家庭以外でも日常的にケア(注意)が必要であり、ニーズ調査においても、保育・教育施設の配慮や関係者の理解の向上が求められていることから、保育・教育施設におけるアレルギーへの更なる理解と組織的な取組みが必要である。

なお、生後3ヶ月までの授乳方法に関しては、前回調査同様、食物アレルギーの症状があった者とアトピー性皮膚炎の症状があった者で、症状がなかった者に比べ母乳の割合が高かった。しかし、授

乳方法とアレルギー性疾患の発症との関係は未だ明確でなく、本調査の結果だけで母乳の影響について結論付けることはできない。

(3) アレルギー性疾患に関するニーズ

ニーズ調査では、アレルギー性疾患の有無にかかわらず多くの意見・要望があった。

とくに、情報・正しい知識を得たいというニーズが多く、その理由として、「薬の副作用が心配」「診断・治療・対応などの方針が統一されていない」などのほか、現在アレルギーの症状がない者からも「いつか発症するかもしれない」「情報が多すぎる・曖昧」などの意見があげられた。

また、アレルギーのある児への配慮や個別対応を望む声、アレルギーに対する周囲（社会）の理解・関心を求める声も多かった。

(4) 今後の課題

本調査により、都内の3歳児におけるアレルギーの現状と推移を示した貴重なデータが得られた。都内の3歳児のうちこれまでに何らかのアレルギーの症状があった者が半数を上回り、前回調査の「5人に2人」から大きく増加していることから、アレルギーを小児全般の健康に係る問題ととらえていく必要があると言える。また、家庭でのケアに加え、保育・教育施設においてもアレルギー性疾患への理解をより深め、対策をすすめていくことが求められている。

アレルギー性疾患は慢性疾患であり長期管理を要することが多いため、日常生活における自己管理と医療の継続が欠かせない。自己管理については、抗原回避や受動喫煙防止などの正しい知識・情報を提供するとともに、生活の場で実践できるよう具体的な相談に応じる場の整備が必要である。また、医療については、身近なかかりつけ医でも適切な診断・治療が行われるよう、診療ガイドライン等の普及が急がれる。さらに、自己判断による治療中断や不必要な食物制限・除去を避けるために、患者・家族が主治医とのパートナーシップを基に納得して治療を受けられるよう支援することも重要である。

アレルギーに関する正しい知識・情報を提供することは、発症予防や早期対応に有効であり、発症に対する不安軽減にも役立つ。母子保健事業等さまざまな機会をとらえて、現在症状がない者も含め、幅広い対象への普及啓発に取り組み、アレルギーに対する社会の理解を高めることが次世代対策として重要と言える。

東京都では、「都におけるアレルギー性疾患対策の在り方最終報告」（平成13年度）に基づき、総合的なアレルギー対策に取り組んできた。厚生労働省も平成17年10月に「アレルギー疾患対策の方向性等」³⁾を公表し、対策を打ち出したところである。

これらの対策と今回の調査結果を踏まえ、今後は地域の保健所・保健センターは言うまでもなく、医療機関や保育・教育機関等とも連携し、さまざまな角度から総合的なアレルギー性疾患対策を推進していく必要がある。

引用文献

- 1) 鼻アレルギー診療ガイドラインー通年性鼻炎と花粉症ー2005年版（改訂第5版），鼻アレルギー診療ガイドライン作成委員会，2005
- 2) 平成15年度保健福祉動向調査，厚生労働省
- 3) アレルギー疾患対策の方向性等，厚生労働省，平成17年10月